

恩加島新田は、もと木津川河口の寄州よりすでしたが、
東成郡千林村(現旭区)の岡島嘉平次おがしまかへいじが開発を始め、文政12年(1829年)に検地を受けました。名称は当時の代官岸本武太夫の命で「岡島」を「恩加島」と換用したものです。

恩加島新田のうち、北側が「北恩加島新田」、南側が「南恩加島新田」となりました。

嘉永4年(1851年)発行の「浪華の賑ひ」なにわにぎわいによれば南恩加島を含む木津川口を挿絵入りで紹介しており、「此所は浪花の津の湊口にして諸国の海船出入の要津にかかるゆえに、廻舟の便利よからしめんが為、去る天保3年(1832年)…870間余(1500m余)の石塘いしづつみを築き…実に万代不朽にして浪花繁栄の基…又此堤は上に数株の松を植えつらねり、故に俗に木津川の千本松という。洋々たる滄海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天の橋立、三保の松原なども外ならずと覚ゆ」と記されています。

嘉永7年(1854年)ロシアのプチャーチンが乗船するディアナ号が大坂に来た時は、木津川沿岸には紀州兵など2600人や43隻の番船を浮かべるなど沿岸警備が行われました。また、将軍家茂が文久3年(1863年)に大坂の海岸部を巡視した時の木津川口の守備は土佐藩が行っておりました。



『大正区ホームページ』から転載

